

平成22年 6月 16日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18500597  
 研究課題名（和文） 多動・衝動的傾向を示す幼児の保育の場における援助方法・システムの開発  
 研究課題名（英文） Method and system for supporting children with tendencies of hyperactivity and impulsivity in Preschool  
 研究代表者  
 山本 理絵（YAMAMOTO RIE）  
 愛知県立大学・教育福祉学部・准教授  
 研究者番号：60249282

研究成果の概要（和文）：幼稚園・保育所等の集団保育の場における多動・衝動的傾向のある幼児（ADHD、高機能自閉症などの発達障害の疑いをもつ子どもも含む）の、問題行動や発達経過および、そのような子どもや親に対する支援方法について、幼稚園・保育所を対象とした質問紙調査、聞き取り調査、観察等により分析・考察し、幼稚園・保育所における援助方法、及び、学校、保健センター、療育機関等との連携・支援システムについて提起した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to propose the method and system for supporting children with tendencies of hyperactivity and impulsivity in preschool. This research examined the children's troubles and development, supporting method for those children and their parents and cooperation with school, health center and the special resources through the questionnaires from the principals of kindergartens and day-care centers, interview with them and observation of the children.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,600,000	0	1,600,000
19年度	800,000	240,000	1,040,000
20年度	500,000	150,000	650,000
21年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	570,000	4,070,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：(1)保育 (2)発達障害 (3)多動 (4)巡回指導・巡回訪問 (5)援助方法 (6)連携システム (7)幼小連携 (8)特別支援教育

## 1. 研究開始当初の背景

多動・衝動的傾向などをもつ幼児が増えてきていると言われており、家庭育児や保育の場で、その対応に困惑している。こうした問題は、ADHDや高機能広汎性発達障害などの発

達障害によるものであったり、子どもの発達に何らかの問題兆候が見られていたり、気質的な問題をもっている場合、あるいは家庭での養育態度・虐待の影響があるのではないかとということが、指摘されているが、幼児期に

おいてはとくに診断・判断が難しく、援助方法も確立されていない。

研究開始当初には、(軽度)発達障害の子どもの問題が注目され研究されるようになってきて、少年期・青年期においては研究が盛んになってきていた。しかし幼児期に関しては、医療、療育の分野では少しずつ、発見と療育方法の研究が進んできているものの、幼稚園・保育所などの集団保育の場における援助方法に関しては、あまり研究報告がなかった。衝動性や情緒の未発達、行動統制の悪さなどをもつ子どもたちやその家族を幼児期から支援していく必要性が議論されていた。

特に通常の保育の場ではこのような子どもたちの保育・援助方法を試行錯誤しており、保育所での実践に基づく事例が少しずつ報告されるようになったが、まだまだ先行研究が少なく課題とされていた。

このような状況の中で、幼稚園・保育所などの集団保育の場で、多動・衝動的傾向を示す幼児、軽度発達障害のリスクをもつ幼児をどのように保育し、援助していくのか、援助方法・システムを開発することは意義が大きいと思われた。

## 2. 研究の目的

(1) 幼稚園・保育所等の集団保育の場における多動・衝動的傾向のある幼児(ADHD, 高機能自閉症などの発達障害の疑いをもつ子どもも含む)の事例を収集し、発達経過および家庭や保育・教育機関での問題行動や行動特徴、及びそのような子どもや親に対する支援方法を明らかにする。

(2) このような子どもたちの保育の場とその親への、幼児期段階からの家庭・保育・教育・療育機関でのかかわり方、支援のあり方について検討し、保育所・幼稚園・学校、及び保健センター、療育機関等の連携・支援システムについて提起する。

## 3. 研究の方法

(1) 愛知県内の全幼稚園・保育所を対象として発達障害の幼児の在籍状況と支援方法・システムの現状、支援要求について質問紙調査を実施し(平成18年度)、結果を分析した。

(2) 幼稚園・保育所における、発達障害の幼児への援助方法や小学校や他機関との連携・システムについて、全国で先進的に取り組んでいる事例について、資料収集・聞き取り調査を行った。

(3) 幼稚園・保育所等における多動・衝動的傾向のある幼児(ADHD, 高機能自閉症など

の発達障害の疑いをもつ子どもも含む)の事例を、観察、聞き取り調査等により収集し、分析し、援助方法について考察した。

## 4. 研究成果

(1) 愛知県内の全幼稚園・保育所を対象として発達障害の幼児の在籍状況と支援方法・システムの現状、支援要求について質問紙調査を実施し(平成18年度)、幼稚園・保育所における軽度発達障害の(疑いを含めた)ある幼児に対応した支援体制の現状と課題を明らかにした。

障害児保育の補助制度の有無、障害児への指導方法、指導計画の作成状況について、園内体制、巡回指導・相談の有無、外部との連携、研修の機会等の現状と、必要な支援内容や、親と保育者との連携、障害児受け入れの人的財政的援助、小学校との連携についての課題が明らかになった。

全国的には、幼稚園・保育所段階におけるこのような状況に関する調査はほとんど行われていなかったため、貴重な資料・分析となった。

(2) 上記調査結果について、障害児の有無別、巡回指導の有無別に、支援システムの状況を分析した。認定されている障害児が在籍している園のうち、加配保育者等の補助を受けている園はとくに私立幼稚園で少なかったが、障害児の在籍の有無に関係なく、加配保育者や障害児対応の補助金をととも必要とする園が多かった。

巡回指導・相談があった園は、障害児に対する個別の指導計画を作成している園、園内研修をしている園、他機関との連携がある園、特別支援教育コーディネーターの役割を担う保育者を明確にしている園の比率が、巡回指導・相談がなかった園に比べて高かった。また、認定されている障害児がいない園でも、巡回指導・相談のニーズは高かった。巡回指導・相談が園内研修や指導計画づくり、園外との連携などを推進する役割を果たしていることが明らかになった。

外部からの巡回指導・相談は、障害をもつ幼児の保育についての園内の保育力量を増大させ、園外との連携を促進していること、巡回指導・相談が園内の保育者集団の中で受け入れられ、協働できる場合、より有効になることが示唆された。今後、他機関との連携による巡回相談・指導と園内の保育者集団の協働の両側面から支援体制を充実させていくことが望まれる。

(3) スウェーデン、フィンランドでは、各保育園には障害児を援助するスタッフが配置されており、障害が診断されていなくても、

必要とされる子どもにはアシスタントがついている。また、特別指導のための教員が巡回し、一定の時間小グループでの遊びを指導している。フィンランドでは、保育・幼児教育におけるナショナルカリキュラムのガイドラインが作られ、スペシャルニーズをもつ子どもの保育を、医療、教育、保育の連携によって推進することも課題となっている。乳幼児健診はこまめに行われ、就学までチェックとフォローが継続的に行われ、小学校への移行もスムーズに行われるように配慮されている（実地視察調査より）。

このような充実した支援体制が整えられることが必要であり、巡回指導の方法や健診システムが参考になる。

(4) 幼稚園・保育所と小学校や他機関との連携については、教育・福祉・医療等諸機関のネットワークの中での巡回指導・相談や意見交換、幼稚園と「ことばの教室」（通級指導教室）との連携、特別支援教育コーディネーターや加配担当者の役割と他の職員や外部との連携の仕方、小学校へ引き継ぐ際、「個人カルテ」や「個別指導計画」等を活用するとともに、書類だけではなく、相互に訪問・観察し、共同で事例検討し共通理解を深めていくこと、保育者と保護者の信頼関係のもとに、継続的な記録を作成し対応を伝えながら、個別の指導計画を一緒につくること、地域や周りの保護者の理解を高める取り組みの重要性が明らかになった。

(5) 自閉症や多動傾向のある幼児について、幼稚園・保育所等で観察・聞き取り及び事例検討を行い、そのうちの1事例は、障害児通園施設での1年3か月間にわたる子どもの変化と援助過程についてまとめた。絵本を介しての多動・自閉症の幼児への保育者の具体的な援助について、長期間の子どもの変化と援助の過程を分析することによって、長期的な見通しをもった援助方法が明らかになった。

実践事例をもとに、自閉症幼児が絵本にどのようにして興味をもち、絵本を理解し、保育者や周りの友達と人間関係を広げていくかを分析することによって、保育における援助方法を検討した。そのさい、保育実践を、子どもとモノの関係、子どもと保育者、子どもどうしとの関係、それらの相互作用という構造において捉えた。

その結果、以下の点が明らかになった。①興味をもちやすい絵本の特徴を保育者が理解し、絵本をおもちゃのように扱うことも受け入れながら、子どもとの信頼関係をつくる。②集団での読み聞かせや個別の読み聞かせを継続することによって、好きな絵本や気に入った場面が生まれ、主体的に自分で絵本を

引っ張り出すようになる。③絵本は、注視しやすい大型絵本であったり、場面の転換がわかりやすい絵、抑揚のある短いせりふ、期待感をもたせるような読み方・めくり方が大事である。④絵本への関心から友達へ関心が向けられ、友達との関わりが持続するように、その子どもの興味の示し方や思いを集団に伝え、共感し模倣しあったり、好きな友達と一緒に絵本を見るようにしたりと、個と個、個と集団をつなぐような働きかけが重要である。⑤絵本への興味・理解と友達への関心は、相互に作用しあって高まっていくので、両者を視野に入れて働きかけていく必要がある。⑥保育者が保護者の不安を受けとめ、わが子を客観的に見ていけるような援助や、保護者の仲間づくりの援助をすることが、子どもの発達にも影響を及ぼしている。このような成果を幼稚園・保育所でも活かしていくことが課題である。

(6) 幼児のクラス集団から「逸脱」しているように見える子どもの理解と集団活動における配慮・援助の工夫、集団での関係づくり・学級づくりのための指導のポイントを、保育実践・事例の考察をもとに、理論化しつつ提起した。

子どもに活動の見通しを持たせること、安心して期待をもって取り組める活動を組織すること、自分で活動に区切りをつけて切り替えることができるようにすること、子どもの思いを聞き取り共感し、表現できるようにする援助、多動やパニックを誘発しない環境づくり、小グループでの活動を支えに共感的なかかわりをつくること、安心して過ごせる居場所づくり、集団での納得と合意・相互理解をひきだすことなどの重要性が認められた。

平成19年度から特別支援教育がスタートしたが、教育実践を進める理論と方法が明らかにされていない状況がある中で、通常学級での特別支援教育・保育について、学級づくりを柱に、その実践の方法を展望した点に意義がある。

(7) 保育実践観察により、異年齢保育の中で、多動・衝動的傾向を示す幼児が、落ち着いて生活するようになり、友達との関係を発展させていくという変化がみられた。異年齢保育の意義と、その中でみられる子ども達の関係、保育者の指導・援助の方法について整理した。とくに、表面的にできた・できなかったという点検主義に陥らない目標の設定と評価のしかた、子どもが安心感をもって生活し、子どもどうしの認め合いによって、自尊感情・自己肯定感が高まる点について考察した。また、異年齢保育を実施していくうえでの課題についてもまとめた。

異年齢保育の方法についての理論化が進んでいない状況の中で、この方法に着目し、多動・衝動的傾向を示す幼児にとっての効果を検討している点に意義がある。今後は、多動・衝動的傾向を示す幼児、発達障害をもつ幼児にとって効果的な異年齢保育の方法をさらに具体的に明らかにしていくことが課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 山本理絵、神田直子、幼稚園・保育所における障害のある幼児に対応した支援体制の実態と課題—巡回指導・相談の視点から、SNE ジャーナル、査読有、14、2008、pp. 108-124
- ② 山本 理絵、近藤 みえ子、自閉症幼児に対する絵本を介した発達支援、保育の研究、査読有、22 号、2008、pp. 54-66
- ③ 山本 理絵、神田 直子、幼稚園・保育所における軽度発達障害のある幼児に対応した支援体制、愛知県立大学児童教育学科論集、査読無、41 号、2007、pp. 69-80
- ④ 山本 理絵、神田 直子他、発達障害児の幼児期から小学校への移行支援、愛知県立大学児童教育学科論集、査読無、41 号、2007 pp. 51-67

[学会発表] (計 5 件)

- ① 山本理絵、軽度発達障害児の幼児期から小学校への移行支援、日本保育学会第 60 回大会 自主シンポジウム、2007 年 5 月 20 日、十文字学園女子大学
- ② 山本理絵、幼児期から小学校への移行期の支援と課題、日本特別ニーズ教育学会第 15 回大会 学会研究課題「就学前の特別支援」シンポジウム (依頼)、2009 年 10 月 17 日、山形大学

[図書] (計 6 件)

- ① 湯浅恭正編・山本理絵他著、明治図書、特別支援教育を変える授業づくり・学級づくり 1 芽ばえを育む授業づくり・学級づくり 幼稚園～小学校低学年、(第 2 章 幼稚園・小学校低学年の学級づくりのポイント) 2009、pp. 25-41

[その他] 報道

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 理絵 (YAMAMOTO RIE)  
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授  
研究者番号：60249282

##### (2) 研究分担者

神田 直子 (KANDA NAOKO)  
愛知県立大学・教育福祉学部・教授  
研究者番号：30117783  
(H19→H20：連携研究者)

別府 悦子 (BEPPE ETSUKO)  
中部学院大学 子ども福祉学部・教授  
研究者番号：60285195  
(H19→H20：連携研究者)

神田 英雄 (KANDA HIDEO)  
桜花学園大学 保育学部・教授  
研究者番号：40177762  
(H19 まで)